日刊工業新聞
年月日 18 10 08 ページ 11 NO.

挑戦する企業

和魂洋才 世界のリーダーへ

武田薬品工業 ⑥

科学を薬に

日本に創薬の生態系構築

「エコシステム（生態系）を構築し、科学を医薬品に変えていく流れを加速したい」。武田薬品工業社長のクリストフ・ウェバーは4月、湘南ヘルスイノベーションパーク（湘南アイパーク、神奈川県藤沢市）の開所式で決意を示した。

同パークは従来、武田の湘南研究所だったが、産学官で連携する創薬拠点として刷新。武田から独立した会社などが入居するとともに、武田と資本関係のない製薬企業や創薬ベンチャー（VB）にも門戸を開いた。直近では日本IBMやPHC（東京都港区）が入居。IBMの例では、人工知能（AI）を健康関連分野の技術革新に活用することが期待されている。

「まずはバイオVBを数多く育て上げることが重要」。湘南アイパークのジェネラルマネジャーである藤本利夫は、こう指摘する。医薬品産業では創薬手法や未充足の医療ニーズの変化に伴い、大手製薬企業でも自社単独で研究を進める難しさが増した。このため各社は社外からの創薬シーズ導入を積極化。藤本によると、特に米国で学術機関やバイオVB起源の開発品が多いという。

VB育成の機運高める

一方、日本ではまだVBの存在感が大きいとは言い難い。経済産業省が4月にまとめたバイオVB関連の報告書では、国内創薬型VBの時価総額は欧米のみならず中国や韓国よりも小さいと指摘されている。藤本はこうした現状の改善に湘南アイパークが貢献するとともに、「育ってきたバイオVBの中で、一つでも二つでも武田の開発品につながるものがあればいい」と考えている。

ジレンマも

藤本は4―5年後に同パークへの入居社数を10月初旬時点比約8倍の200社にしたい考え。ただ、武田の〝色〟が出ることのジレンマに悩んでいる。現状は「武田が（運営を）サポートしなければこのパークは立ちゆかない」状況で、競合他社にとっては参加しづらい雰囲気になっている可能性が否定できない。

▲産学官が連携する創薬拠点を目指す（4月の湘南アイパーク開所式）

「いくつかの企業に試しで入って頂いて、本当に研究や交流が進むことを示していければ、後が続いて下さる」。成功事例を積み重ねるべく藤本は奔走する。

（敬称略）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社